

熊谷市 野原古墳出土「踊る埴輪」展

～「踊る埴輪」とそのイメージの波及について～



会期：令和7年5月7日（水）～10月31日（金）

会場：熊谷市立江南文化財センター ロビー

1 はじめに

「踊る埴輪」は、昭和5年（1930）に畑の開墾中に発見されました。その後、東京帝室博物館（現東京国立博物館）が購入し、現在に至っています。一般的には「踊る埴輪」の名称で多くの人を知るこの埴輪は、過去には「踊る男女像」と呼称されましたが、現在の資料名は「踊る人々」です。

目と口を大きく開けた愛嬌のある造形は、多くの人々を魅了し、東京国立博物館のマスコットキャラクター「トーハクくん（本名：東 博（あずまひろし）」をはじめ多くのキャラクター製品のモチーフとなり、親しまれています。

そして、発見直後の修理復元箇所の経年劣化が著しいことから、令和4～5年度には本格的な解体修理が行われ、令和6年には東京国立博物館で、令和7年には九州国立博物館で開催の特別展「はにわ」展において初お披露目され、大いに話題になりました。

この度は、令和7年度の江南文化財センター新規事業「踊る埴輪」知名度アップ事業とタイアップしての展示であり、「踊る埴輪」（レプリカ）と関連の資料などを展示します。

本展示を通して、この埴輪の歴史的な経緯や、全国的に見ることができる「踊る埴輪」の造形イメージの波及について理解が深まれば幸いです。

2 野原古墳と「踊る埴輪」の発見

(1) 野原古墳群・野原古墳について

野原古墳群は、熊谷市南部の野原地内に分布する古墳群で、江南台地南縁部の標高40～50m 前後の平坦面に、20数基の古墳が確認されています（第1図）。

「踊る埴輪」は、野原古墳群中の野原古墳から出土しました。この野原古墳では、昭和5年（1930）に開墾中、本埴輪をはじめとした多数の出土遺物が発見されました。そして、昭和37年（1962）には採土工事に伴う発掘調査が実施され、第2図のように2か所に横穴式石室を持つ構造の前方後円墳であることが明らかとなりました。なお、採土工事中には、襷（たすき）をかけた女子像、男子像頭部・髷（さし）形埴

輪・大刀形埴輪・馬形埴輪頭部破片、動物埴輪、朝顔形埴輪などが採取され、工事担当者が保管していましたが、その後、江南町（現熊谷市）に寄贈されています。

本墳は、野原古墳群の中でも南側に位置し（第1図）、墳丘の主軸を南南東の方角に築造され、その規模は、全長約40m、高さ5m、後円部径約16mを測りました（第2図）が、現在は消滅しています。

前方部と後円部に各々1つずつ確認された埋葬施設である横穴式石室は、いずれも凝灰岩の切石を用いて造られていました。

前方部の石室は、前方部の前面に、おおむね南東に開口する胴張りのある片袖型石室で、副葬品は、大刀（たち）1点、刀子（とうす）片2点が出土しました。時期は、6世紀末と考えられます（第3図）。

後円部の石室は、墳丘の主軸に直行するようにほぼ南西に向かって開口するやや羽子板形直線胴の片袖型石室で、副葬品は、大刀2点、刀子3点、鉄鏃（てつそく）19点が出土しています。時期は、6世紀後半と考えられます（第4図）。

したがって、本墳は、古墳時代後期の6世紀後半代に築造されたものと考えられます。

(2) 「踊る埴輪」の発見とその後について

昭和5年（1930）3月、当時の小原村大字野原（現熊谷市野原）にて開墾中、「踊る埴輪」を含む人物埴輪、馬形埴輪、勾玉、刀、金環、鉄鏃が発見されました。また、同年には隣接する4基の円墳のうち2基が開墾され、金属製品、玉類、須恵器（すえき）、埴輪が発見されています。

その後、昭和6年（1931）に、当時の東京帝室博物館（現東京国立博物館）の後藤守一（ごとう しゅいち）が「踊る男女像」と名付けました。そして、昭和7年（1932）12月に、東京帝室博物館が、上記の遺物を埼玉県から購入しています。

3 「踊る埴輪」に関する疑問

(1) 本当に踊っているのか

片手を挙げ反対側の腕を腰に当てる造形が、踊っている姿を想像させることから、後藤守一により「踊る男女像」と名付けられましたが、近年の考古学的研究では、手綱（たすな）をもって馬を引く「馬子（まご）」であるとの説が有力です。これは、腕を挙げる馬子の埴輪は、馬形埴輪と一緒に出土することが多く、本墳でも馬形埴輪が出土していることから、このことが主たる根拠とされています。踊っているのか？馬子なのか？決着は、まだまだ先のようにです。

(2) 一方が男性で、もう一方が女性か

2体の埴輪のうち背丈の低い方は、顔の両脇に蝶形のような突起が付いていますが、これは当時の男性の髪形である「美豆良（みずら）」を表現したのであり、この埴輪が男性であることを示しています。また、腰の位置には（衣服を結んだ際の）紐が結ばれ、鎌も下げられています。

一方、背丈の高い方は、頭部に髪のような表現はありませんが、両脇に小穴があげられ、耳穴を表現したのではないかとされています。しかし、これが女性の表現とは言い難く、性別が分からないのが現状です。

(3) 埴輪からわかったこと

埴輪からはどのようなことがわかるのでしょうか。両方ともに発見時に、埴輪の下半分が欠損していたため、石膏で復元されています。当初、一方が背丈を高く、もう一方が背丈を低く復元されていました。しかし、近年では、同じ古墳から出土した人物埴輪は、その基部を同じ高さに作る傾向があることから、この度の令和の修理では、そのように復元されています。これにより、背丈の低い方（男性）が、当初復元より少し背丈が高くなりました（江南文化財センター所蔵のレプリカは、当初復元のものです。）。)

また、背丈の低い（男性）の埴輪は、(2)で示した衣服の形状や鎌を下げていること、同じ髪型の「美豆良」でも「上げ美豆良※」であることから、身分が高くない人（農民）又は馬子を表現したのではないかと考えられています。

※ 美豆良 … 耳のあたりに小さくまとめた「上げ美豆良」と、結んだ下端が肩までたれた「下げ美豆良」があり、後者は身分の高い男性の髪型とされています。

(4) どこでつくられたのか

埴輪は、専用の窯で焼かれたことがわかっています。本墳の周辺では、荒川を望む江南台地先端の崖線を利用した窯跡が複数見つかり、北西に約4kmの場所には権現坂埴輪窯跡群という窯跡が見つかりました。この窯で焼かれた埴輪の胎土（材料となる粘土）と踊る埴輪の胎土は似通っており、踊る埴輪は、この窯で焼かれたと推測されています。

4 「踊る埴輪」とそのイメージの全国的な波及について

この埴輪は、発見後すぐに、その親しみやすい造形から文化・芸術分野に大きな影響を与え、その影響を受けた作品が多数作られました。

また、一般的に「踊る埴輪」とよばれ、近年では、全国の埴輪の代表格としてのイメージが定着しており、埴輪と言ったらこの埴輪を先ず連想する方も多いはずです。所蔵する東京国立博物館でも、これをモチーフにした「トーハクくん」を誕生させ、マスコットキャラクターとして活用し、また全国

的に、埴輪のイメージとして活用されているほか、お菓子、カプセルトイ、ぬいぐるみ、ストラップなどのモチーフとして多数のキャラクターグッズが作成、販売されています。

5 おわりに

野原古墳から出土した「踊る埴輪」は、東京帝室博物館に購入され、埴輪の優品として古くから多くの人々に親しまれています。

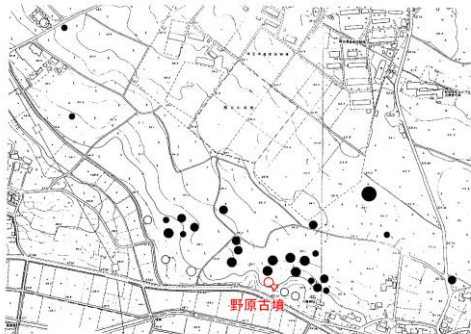
令和4～5年度の発見当初の復元修理以来の本格的解体修理を経て、東京国立博物館での初お披露目を兼ねた特別展「はにわ」では、そのプロローグの埴輪として展示され、30万人を超える人々が来場し鑑賞しました。

これからも、その素朴で、とても親しみが感じられる愛らしい風貌は、きっと多くの人々を魅了していくことになるでしょう。

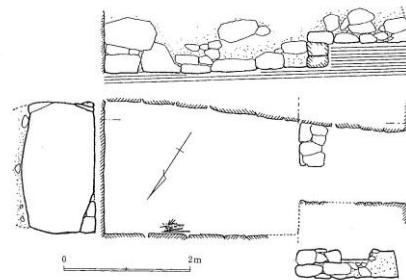
私たちは、この埴輪が唯一熊谷市で出土したことを誇りとして、永遠に語り継いでいこうと思います。

【参考文献】

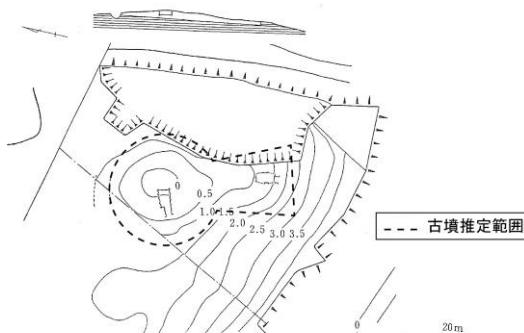
- 1962年 柳田 敏司「おどる埴輪を出土した前方後円墳について」『埼玉研究』6
埼玉地理学会・埼玉県地方史研究会・埼玉県考古学会
1995年『江南町史 資料編1』 江南町教育委員会
2024年 特別展『はにわ』展示図録 東京国立博物館



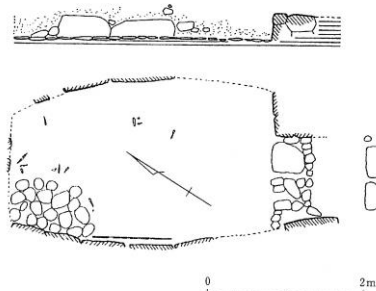
第1図 野原古墳群古墳分布図



第3図 野原古墳後円部石室実測図



第2図 野原古墳群・野原古墳実測図



第4図 野原古墳前方部実測図

令和7年5月7日発行

編集・発行：熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係（熊谷市立江南文化財センター）